Stingers Up!

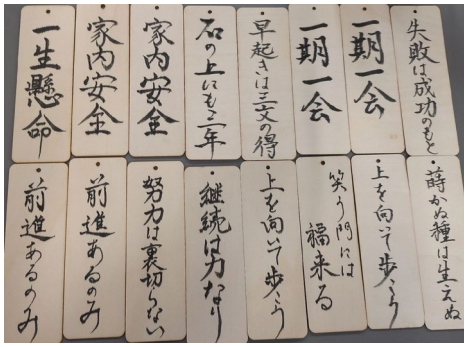
（Sac State の学生や卒業生が一致団結するときや Sac State の誇りを示すために言うフレーズ。小指を挙げるハンドサインとともに Stingers Up! と言うことが多い。）

氏名	濱野有実香
学部/研究科・学年（留学時）	教育学部小学校サブコース　4 回生
留学国名	アメリカ合衆国
留学期間	1 年
実施年月	2024 年 1 月 16 日～2024 年 12 月 29 日

1．はじめに

はじめに、「愛媛大学海外派遣（長期）奨学金」のご支援をしていただいたことに、心より感謝申し上げます。本報告書では、カリフォルニア州立大学サクラメント校（California State University of Sacramento, CSUS, Sac State）での約 1 年間の留学生活について報告いたします。

【留学終了時の写真】



【4 月の Japan Day（日本文化フェスティバル）：私が木の栞の表側に日本語のことわざ等を、裏側に購入者の名前を書き、販売して得たお金を全て、約 10 万円を能登半島地震義援金募金に充てた。その時のブースメンバーとの写真と木の栞の製作過程の写真。】

２．留学をしようと思った理由

高校２年生の時、広島県グアナファト州青少年交流派遣事業に参加し、メキシコ・グアナファト州に 10 日間滞在した。当時、午前中お菓子を売り午後に学校に行く子どもや、路上でボールを売り学校にさえ行けていない子どもを目の当たりにした。そのときから、世界の教育事情にも目を向けるようになった。コロナ禍で大学在学中の留学を諦めた時期もあったが、世界の教育情報を取り入れるように心がけた。2023 年 3 月にワシントン大学ボセル校からの留学生のための通訳ボランティアに参加したことで友人関係が広がり、そこから文化の違い等を学ぶことが楽しくなり、再び留学を視野に入れるようにもなった。教師になる前に、一度何も知らないところで学んでみたい、それにより知見を広げるだけでなく、私自身がそのような経験をすることで、将来、何かができなくて困っている子の気持ちをより分かる教師でありたい、という気持ちも理由の 1 つである。留学に対して色々な気持ちが混じる中、元々苦手だった英語の学習を継続したことで、2023 年 5 月に受けた TOEFL が留学に必要な基準点を超え、自信が持てたので、最終的にそれが留学の決め手となった。

左：【留学中沢山お世話になった、松山サクラメント姉妹都市協会元会長のエスペホさんとそのご家族とピクニック at 広島の方から贈呈された桜が満開の公園】
右：【友人とハイキング at サンノゼ・ミッションピーク】

３．その大学を選んだ理由

私は、日本語、英語、少しのスペイン語を知っているという状況であったため、英語圏もしくはヨーロッパへの留学を視野に入れていた。ただ、私が体育教育学の文献を読んだ際、Adapted Physical Education（通称 APE：障がいを持った子が通常の体育で他の皆と活動するインクルーシブ体育のことと、それをできるために障がいを持った子に対して必要な能力をつけていく段階のことを総称して APE という。）に興味を持った。そして、教育学についての文献を読んだ時、アメリカ発の 4 分野統合教育である STEM（Science, Technology, Engineering, Math）教育にも興味を持った（現在 Art を入れて STEAM 教育と呼ばれることもある）。APE や STEM 教育についても学習したいという気持ちから、アメリカを留学先として考えるようになった。

今回 Sac State を選んだ理由として、Sac State が多様性上位の大学であることをホームペ

ージから知り、多様な人々がいる中で生活をしてみたい、色んな考え方を知り視野を広げたいと思ったからである。また、教育実習が必要なクラスもあり、それらを受講することによって座学だけでなく実践も可能であることに気づいたことも理由の 1 つである。

左：【松山サクラメント姉妹都市協会の方と最後の食事会】
右：【友人と NBA 観戦（Sacramento Kings)】

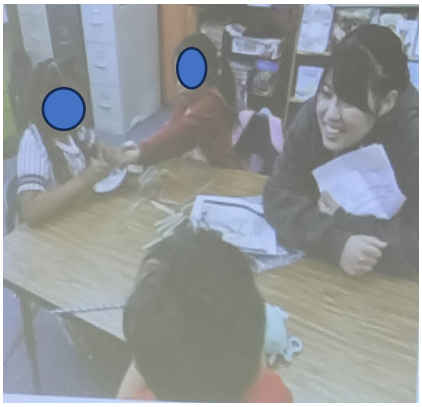
左：【カリフォルニア州会議事堂（サクラメントにあります。)】
右：【ユニクログランドオープンでの書道ボランティア at Arden Fair Mall】

4．留学先で学んだこと（授業の様子）

Sac State は 1 月中旬から 5 月初旬までの Spring Semester （以下、春学期）と 8 月下旬から 12 月中旬までの Fall Semester（以下、秋学期）の 2 学期が Academic Semester、学期期間である。最初の春学期には、授業についていくことに必死であったが、予習復習を欠かさないことで、徐々に授業内で理解できるようになった。教授の話の途中でも何か質問があれば、すぐに挙手をするという授業スタイルから、クラスメイトの主体性に鼓舞され、「1 日に 1 回は挙手をし質問する」とマイルールを決めた。春学期は「小学校低学年の子に読み聞かせから読み書きを教える授業」、「STEM 教育」、「バイリンガル教育」、「クリティカルシンキング」の 4 つの授業を受講した。そのうち「小学校低学年の子に読み聞かせから読み書

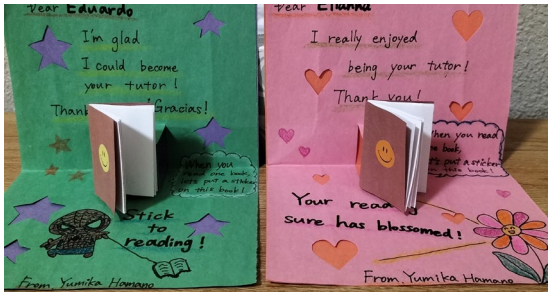
きを教える授業」、「STEM 教育」、「バイリンガル教育」の 3 つの授業では教育実習が必要であり 2 つの小学校で実習を行った。「STEM 教育」では、20 人前後の小学校 1 年生に対して、アフタースクールプログラムとして主に理科実験等を行った。通常の授業が全て終わった後のため疲れている子どもがいるということと、親が迎えに来た子どもは順に帰っていくため授業中に子どもの数が減っていくということから、活動に子どもたちの興味を向けさせる工夫について大学生同士で意見交換をした。

「小学校低学年の子に読み聞かせから読み書きを教える授業」と「バイリンガル教育」の授業に関しては、大学生 1 人子ども 2 人の所謂チュータースタイルで、バイリンガルもしくはマルチリンガルの小学校 1 年生に対し、読み書きを教えた。3 年前にアフガニスタンから引っ越してきた子ども 1 人、ご両親がメキシコ出身でアメリカが生まれ育った子ども 2 人（途中で 1 人引っ越しし、新しくもう 1 人も担当した。）を担当した。お話することが大好きで想像力が豊かな子どもたちの読み書き能力が上がるよう日々丁寧に Lesson plan（学習指導案）や単語カード、絵カード、すごろく、達成シートを準備しチューターを行っていた。バイリンガル、マルチリンガルの子どもが学級にいるときの、その子どもへのサポートの仕方と、みんなで成長できる学級をつくる方法について考え、実践することができた。



【STEM 教育のコーティーチングで子どもたちとコミュニケーションをとっている様子】

【読み書き指導に使った手作りボードと読み書き指導最中の子どもの様子】



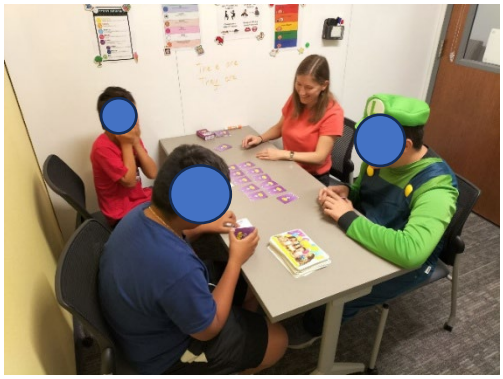
【担当した子どもへのメッセージカード】

秋学期には、「特別支援教育(観察実習必須)」、「都市教育」、「アメリカ教育における性別&ジェンダーステレオタイプ論」、「体育における評価方法」の 4 つの授業を受講した。「特別支援教育(観察実習必須)」では、大学の授業時間以外で週に 3 回、ルームメイトの貸してくれた自転車で中学校に観察実習に行った。General Education Classroom（3 ルーム), Special Education Classroom, Speech-language Therapy, Adapted Physical Education の 6 教室に加えて、「Rally（ラリー)」と呼ばれる運動会と文化祭の中間のような学校行事も観察した。日本とアメリカの特別支援教育において、個別の教育支援計画（アメリカでは IEP）を作成することや、特別支援を必要とする子どもたちに対する専門的な支援をすることの類似点を知ることができた。また、日本では特別支援学校や特別支援学級により障がいの程度や種類に応じて分けられている点、アメリカでは IEP 作成に保護者参加の義務がある点や、IDEA (Individuals with Disabilities Education Act）により 22 歳になるまでか高校卒業まで（どちらか早い方）は特別支援教育が法的制度として整っている点などの相違点についても学ぶことができた。Speech-language Therapy に関して、私が最も興味深かった点は、バイリンガルの子どもの言語発達の遅れの原因が、他の言語を話す影響によるものならば Speech-language Therapy の受講者には該当せず、口腔系の発達や神経伝達系の発達によるものならば受講者に該当し、さらに専門家でも判断が難しい時があるという点である。そして、アメリカ発祥で最近日本でも広がりつつある Adapted Physical Education（日本ではアダプテッド体育という言葉で広がっている。）に関して、アメリカでは昔、障がい者スポーツに値するものがなかったため、障がいを持った子が通常の体育でみんなと一緒に体育をできるように段階を追ってサポートしていく体育が生まれ、それが Adapted Physical Education（通称：APE）と呼ばれるようになったことを詳しく理解することができた。つまり、障がいを持った子がインクルーシブ体育として通常の体育授業に参加してみんなと体育をすることも、その子が通常体育への参加に必要な力を身に付けるために APE の先生とマンツーマンや少人数で体育を行うことも、総称して APE と呼ばれているのである。

また、アメリカでは人口が増えているため、「都市教育」の重要性を感じただけでなく、多様な民族が集まる「メルティングポット」としてのアメリカでみんなが公平に教育を享受するためにはどうすべきか、という点について「アメリカ教育における性別&ジェンダーステレオタイプ論」の授業で深く考えるきっかけになった。日本も徐々に多様化しつつある現

在、アメリカで学んだことを今後大いに生かすことができると感じている。「体育における評価方法」の授業からは、講義から評価の意義や効果的な評価方法を学んだ。模擬授業を通してそれらを再確認し、新しい評価方法を考察することで視野を広げた。そして、どの教科でも大切な評価の透明性について吟味することの大切さを学んだ。

【中学校での Rally の様子】



【Speech-language Therapy の観察（中学校)】

【体育の模擬授業の様子】

5．現地での生活（住まいや食事）

春学期は寮に住んだ。プライベートルームはあるが、バスルーム 2 つを 5 人でシェアするといった部屋であった。2024 年の春学期から交換留学した日本人は私 1 人で、既に 2023 年の秋学期から居たもう 1 人の日本人は別の部屋であったため、ルームメイトは全員日本人ではなかった。私としては、もう少しルームメイトとコミュニケーションを取りたかったが、そもそもルームメイト 2 人は部屋に居なかったり、他のルームメイトは部屋に籠ることの方が好きだったりと、なかなか一緒に会話をする機会等がなかった。寮の食事に関しては、多様性のカリフォルニアということもあり、アジア系のものからアメリカン、中東系、メキシカンまで様々であった。お米が好きな私にとっては大変有難かった。

【友人とタピオカ】

【友人と In-N-Out】

【寮のごはん：メキシコ料理】

春学期から 2 学期間の留学をする人は少なく、3 カ月の夏休みをどう過ごすかが問題になる。アメリカの夏休みは、実家に帰る人が圧倒的に多く、寮に住もうとすれば普段の 1.5 倍程の費用がかかる。春学期の費用でも既に高価だが、さらにとなると金銭的に難しい部分があった。春学期に少し伸びた英語力等をさらに伸ばすには、夏もアメリカに居ることがベストであることは承知の上、カリフォルニアは特に家探しが難しいと言われており、家を探せなかったときの最終手段として一時帰国も心に留めておいた。せっかく頂いた 1 年留学の機会で一時帰国は避けたかったため、アメリカ渡航直後から夏に住むための家を探していると友人たちに相談していた。幸いにも友人が住んでいるシェアハウスを紹介してくれ、そこに夏休み期間と秋学期住むことになった。気さくで優しい家主さんのおかげで、寮よりもはるかにコストを抑えられたことに加えて、何よりもルームメイトやその家族が色んなところに連れて行ってくれたり、様々な経験をさせてくれたりしたことで、素晴らしいシェアハウス生活となった。

【ルームメイトとその家族】【上：友人とカフェ、下：友人宅で日本料理パーティー】

【友人とラーメンディナー】

【友人とタコス】

【友人の誕生日会 at 友人のご両親宅】【クリスマスパーティー at 友人のご両親宅】

6．留学先で楽しかったこと、辛かったこと

まず、辛かったことについて述べる。渡米直後、日本で購入していった SIM カードが使えないハプニングに加えて、寮費支払いの手数料を抑えるために銀行開設、教育実習のための指紋採取とバックグラウンドチェック、中々来ない保険証に関して保険会社との問い合わせ等の事務手続きに追われていた。そして、特に 1 月から 4 月はスピードの速い英語や独特の言い回し表現を理解できず、そのことに落ち込んでいた。しかし、「分からないことは頷かず、分からないと正直に伝えて」という友人の言葉から、分からないことは聞いて学ぶようにし、また事務手続きでスタッフの方と繰り返し話すことによって私の英語力は少しずつ上がっていった。そして、授業やカフェテリア、ジム等で、私から誰かに話しかけることを意識したことで、沢山の友人ができ、友人の存在が私の心の支えになった。

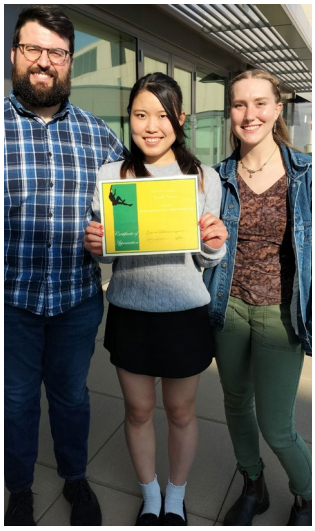
秋学期には朝 7 時半から始まる授業をとっており、まだ暗い時間にシェアハウスから徒歩とバスで登校していたため、少し恐怖を抱えざるを得なかったことや、私の携帯電話がすぐ圏外になってしまっていたため携帯電話をほぼ持っていないに等しかったことも辛かったことである。また、夏休み期間中、5〜6 歳の時住んでいたミシガン州を訪れた際、経由地のシカゴ空港でアジアンヘイトを初めて受けた時は悲しい気持ちになった。

そんな辛いことを忘れさせてくれるくらい、全ての出会いがかけがえのない経験となった。色んな食べ物に挑戦させてくれた友人や、遊びに誘ってくれた友人、授業前後に他愛のない話をして一緒に笑い合った友人、パーティーに呼んでくれた友人とその家族、一緒にアメリカ内旅行をした友人、オフィスアワー以外の時間にも時間をさいて教えてくださった教授、車がない私を教育実習のために小学校まで送迎してくださった教授や友人、私の留学生活を最高のものにしてくれた教授や友人たちに、感謝してもしきれないくらいである。学び

たいことを学ぶことができ、英語力に関しても 5 月にはリスニング力、9 月にはスピーキング力の伸びを実感し、今では 1 月から 4 月の大変だった期間が不可欠であったとさえ思えるくらいにまで成長したことを嬉しく思っている。

【友人と】

また、交換留学生はキャンパス内のみであれば働くことが許可されているが、Social Security Number（通称 SSN：社会保障）を持っていない交換留学生にとって仕事を得るまでのプロセスをパスできないことがほとんどである。秋学期は幸いにも、中高時代のスポーツクライミングの経験を活かせる「クライミングウォールアテンダント」と、「日本語チューター」の 2 つの仕事を頂けた。友人によるレジュメの書き方指導や面接指導がなければ、働くことはできなかっただろうと感じている。(Sac State の国際連携課によると、コロナ以降仕事を得ることができた交換留学生は私が初めてだそうです。今後 Sac State に留学したい方は、キャンパス内でのアルバイトに関して、それほど期待を持たずに留学に行くことをおすすめします。）クライミングウォールアテンダントの仕事を通して、丁寧な英語で説明をする力、コミュニケーション力、危機管理能力の向上が図られた。



左：【私の両側：私を雇って下さったクライミングウォールアテンダントの上司】
中：【クライミングウォールアテンダントの上司と同僚と学期末パーティー】
右：【初めてワークウェアを身にまとう私（友人撮影)】

日本語チューターは私のみだったため同僚とのコミュニケーション等はなかったが、質問に来てくれる日本語学習者である学生の考えを大事にしながら教えることで、日本語と英語の違いにより気づき、言語の奥深さを知った。そして、私自身の異文化理解にもつながり、日本語を分かりやすく教える方法を日本語学習者の視点から模索することができた。実際に、学業と、授業外に行う中学校での観察実習に加えて働くことは簡単ではなかったが、新しいことを覚えながら優しい上司や同僚たちと働いた日々は楽しく、この経験もまた最高の思い出になった。

【日本語チューター感謝状】　【ヨセミテ国立公園】　【ミュージックフェスティバル】

【シェアハウスでの多文化パーティー】

【友人とサクラメントから車で２時間のところにあるレイク・タホ（左：夏、右；冬)】

【2024 年 12 月：帰国前々日のフェアウェルパーティー】

【2025 年 1 月：私の帰国直後に日本旅行に来たサクラメントの友人らを地元広島、
そして道後を案内】

７．終わりに

この留学生活は周りの方の支え無しでは成し得なかったと感じています。留学での素敵な出会いを今後も大切にしていきながら、留学で学んだことや培ったことをこれからも深め、学び続けていきます。この度は、このような貴重な機会を与えてくださり、心より感謝申し上げます。少々長い報告書になりましたが、最後までご覧いただき、ありがとうございました。